

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

現代社会の諸課題にキリスト教がどのように向き合い、何を発信していけるのかを探り続ける研究センターとして

RCCセンター長 打樋 啓史 社会学部教授



一九九七年四月、関西学院大学に「キリスト教と文化研究センター」(RCC)が発足

してから、今年で二二年目を迎えます。本学の建学の精神である「キリスト教主義教育」を、単なる言葉や建前ではなく、この大学を真に活かし、内なる深みから発展させていく力とするために、その内実をより豊かで有意義なものとしていくために、このセンターは始められました。

それゆえRCCは、発足当初からキリスト教を内向きに狭い視野でとらえるのではなく、現代の諸課題にキリスト教が向き合い、触れ合う、その接点で生じてくる様々なテーマを研究するセンターである

ことを理念として歩み続けてきました。研究組織の運営において、神学部教員と学部宗教学事が協力して責任を担いつつ、学内の様々な分野から研究員を広く募って学際的な共同研究活動を行なってきたことにも、RCCの性質が顕著にあらわれています。

最初の五年間の活動は、RCCが学内で広く認知されることの必要性のゆえに、学外の著名人・研究者を講師とした公開講演会の開催を主としたものになりましたが、二〇〇二年度から、プロジェクト単位での研究を進める体制が整えられ、ここからRCCは学内からその成果を発信する力をもつセンターとなり、その活動は大きく発展していきます。それ以降、平和と暴力、市民社会とNGO、スピリチュアリテイ、現代思想／現代哲学、現代文化／ポップカルチャーなどとキリスト教の接点を探る研究、聖書および諸宗教の

聖典と現代の諸課題を対話させる研究、キリスト教と諸宗教の礼拝や儀式の現代的意味についての研究、関西または神戸という地域におけるキリスト教と諸宗教の役割に関する研究、今日におけるキリスト教主義教育の在り方をめぐる研究など、多岐にわたる分野の、それぞれユニークなプロジェクトが立ち上げられ、活発な共同研究が繰り返し広げられてきました。

これら各研究プロジェクトの成果の多くは、出版物として発表されてきました。近年では、『現代文化とキリスト教』(二〇一五年)、『東アジアの平和と和解 キリスト教・NGO・市民社会の役割』(二〇一六年)が公刊されました。

今年度に入ってから、四つの研究プロジェクトが立ち上がり、すでに活動が進められています。常設とも言える「今日におけるキリスト教主義教育の展開」プロジェクト、現代社会における言葉やコミュニケーションとキリスト教の接点を探る「ことばの力」プロジェクト、世界的最重要課題であるエコロジーと聖書を対話させる「エコロジカル聖

書解釈」プロジェクト、そして昨年度まで行われてきた現代文化とキリスト教の接点を探る研究を受け継いだ「映画とキリスト教」プロジェクトの四つです。(各プロジェクトの詳細については次頁以降の報告を参照。)

最後のものについて付言しますと、RCC二五周年記念事業として計画されている、キリスト教に関連する映画のデータブック出版に向けた基礎研究を行なうために立ち上げられたものです。RCC十周年記念事業として『キリスト教平和学事典』が二〇〇九年に出版されてから早くも一〇年が経ちましたが、それに続くこの二五周年事業に向けて、これからの数年間、RCCに関わる一同が力を合わせていきたいと考えています。

最後になりますが、今年度からRCCセンター長に就任した者として、その責任の重さをひしひしと感じています。が、このような役目を与えていただいたことに感謝しつつ、精一杯取り組んでいく所存です。学内の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## ■研究プロジェクト報告

### ■研究プロジェクト

#### ことばの力 ―キリスト教の視点から

RCC センター長 打樋 啓史

近年、インターネットやSNSの発達によって、人々のコミュニケーションが迅速かつ便利になった半面、そこで用いられる「ことば」の希薄化や表層化が指摘され、意思疎通における様々な問題が顕在化しています。このような時代に、人々が互いを理解し合うための言葉、閉塞感のなかで希望を共有できる言葉を見出すことが、大きな課題になっていると言えるでしょう。

キリスト教は、聖書を正典とする「ことばの宗教」です。その前身となるユダヤ教では「ことば」(ダバール)は単なる記号ではなく、できごとを起こす動的な力として理解されますが、キリスト教はその理解を継承しつつ、イエス・キリストを「神のことば」(ロゴス)として位置づけ、イエスの人格、教え、働き、死と復活に「神のことば」が決定的に啓示されたものととらえてきました。本プロジェクトの目的は、

本質的に「ことばの宗教」であるキリスト教において、「神のことば」「神に関わることば」がどのように理解されてきたかを探ることです。それらの言葉は、どのような文脈でどう語られたり記されたりしてきたのか。そのような言葉はコミュニケーションにおいてどのような役割を果たし、影響を与えてきたのか。

これらの問いについて学際的共同研究を行ない、現代における「ことばをめぐる諸問題」にキリスト教の視点から何を発信できるかを探っていきます。キリスト教神学としては、教父学、組織神学、実践神学(礼拝学、説教学)などの視点からの研究、社会的アプローチとしては、コミュニケーションやメディアという観点からの研究、また人類学的アプローチとしては、諸宗教・諸文化における儀礼の言葉研究を行なうことを計画しています。

### ■研究プロジェクト

#### エコロジカル聖書解釈

RCC 主任研究員 大宮 有博

エコロジカル聖書解釈とは、二〇世紀後半の地球環境の危機を背景に、聖書を人間だけを読者対象とする書物としてではなく、全ての「いのち」に宛てて書かれたメッセージとして解釈する試みです。言い換えると、解釈者はフエミニズムやポストコロニアリズム聖書解釈の方法論を応用して、全ての被造物(例えばたぬきやくじら)が聖書

を読んだとしたらどう読むだろうかと考えながら聖書を読みます。

これまで英語圏で発展してきたエコロジカル聖書解釈は、社会的マイノリティが被る環境被害に注目する環境正義の観点を取り入れることに成功しました。さらに日本の文脈でこの方法論を遂行するにあたって、①諸宗教の正典との対話的読み、②水俣や福島で

### ■研究プロジェクト

#### 今日の日本社会におけるキリスト教大学の存在意義と使命

RCC 主任研究員 東 よしみ

この研究プロジェクトでは、キリスト教主義大学がどのような教育に影響を与えているのか、現在の取り組みの実情と課題とを明らかにすることを目的としています。各大学は、授業や授業以外の課外活動を通して、どのような形でキリスト教を学生

や教職員に対して発信し、その教育内容に反映させているのか。それぞれの大学の取り組みを明らかにした上でその意義と効果、課題とを考えます。具体的には、様々なキリスト教主義大学においてキリスト教を教え、チャプレンの立場にある方々を講師として本学に招き、

生まれた環境文学や環境運動との対話、③非キリスト者(田中正造や高木仁三郎など)の聖書の読みとの対話なども考えています。

本プロジェクトは一年目(二〇一九年)に、エコロジカル聖書解釈およびエコフエミニズム神学の基本的文献について収集・分析を行うために読書会を行い、あわせて講師を招いた研究会を行います。二年目には、自然と共生について語りかける聖書箇所を分析します。

本プロジェクトは、RCCが日本におけるエコロジカル聖書の研究拠点となることを目指します。

講演会のシリーズを行うことを予定しています。春学期には、青山学院大学法学部教授、チャプレンである塩谷直也氏を講演会にお招きします。キリスト教主義大学は、学生に何をどのように伝えることができるのか。他大学における取り組みを聞くことで、本学の取り組みの参考としたいと思えます。

また、本学におけるこれまでのキリスト教に関わる発信を収集し『建学の精神考』に公表し、今後どのような発信が求められているのかを考察します。

## ■研究プロジェクト 映画とキリスト教

RCC センター副長 加納 和寛

RCCでは二〇一七―一八年度にプロジェクト「ポップカルチャーとキリスト教」が推進されました。その中でキリスト教をモチーフとした映画が何度か取り上げられました。

これを受けて今年度より映画に焦点を絞ったプロジェクトを立ち上げることになりました。言うまでもなく、キリスト教をモチーフとする映画は無数に製作され続けています。欧米では既存のキリスト

教会が衰退の兆しを顕わにし、人々の生活からキリスト教的要素が薄れつつあると感じる向きも強くある一方で、キリスト教を正面から取り上げた映画が今なお数多く見られるのは決して当たり前ではなく、むしろ興味深いことであるといえます。また、キリスト教を強く批判あるいは揶揄する映画も多くみられますが、これらにはむしろ教会から離れているにもかかわらずキリスト教には（賛否はともか

く）関心を持ち続けていることの表れと理解することもできます。

一方で、こうした映画に表現されているキリスト教のモチーフを読み解くことは、時に専門的な知識を必要とします。特にキリスト教に馴染みがあるわけではない方々にとつては、映画の中に巧みに織り込まれた高度な神学的命題を正確に読み解くのは困難を極めることと思えます。本プロジェクトは、キリスト教の専門家が数多く集まっている関西学院大学の特色を活かし、キリスト教の視点からさまざまな映画を読み解くことを目標としています。プロジェクトの成果は出版物の形で公表できることを目指します。

## 西宮北口キャンパスで「RCCキリスト教講座」を開催

RCCでは、センターの社会貢献活動として、一九九八年度から本学の学生保護者を対象とした「父母のためのキリスト教講座」を開いてきましたが、二〇一四年度よりこれを学生保護者だけではなくより広く一般に開かれたものとして開催することになり、名称を「RCCキリスト教講座」に変更しました。これらの講座は西宮上ヶ原キャンパスで開催されてきましたが、このたび二〇一九年四月に本学の西宮北口キャンパスが開設されたことに伴い、上ヶ原からこの新キャンパスに場所を移して開催するようになりました。アクセスの良さもあつてか、

上ヶ原での講座の場合よりも多くの方々が受講されています。今年度春学期の講座は、打樋啓史RCCセンター長が担当し、「キリスト教とはそもそもどのような宗教なのか」というテーマで開催されました。秋学期は、Christian Treadwell 神学部助教が担当される予定です。



## キャンパスの中のキリスト教シンボル (12)

RCC 主任研究員 橋本 祐樹

昨年度よりこのニューズレターでの連載を再開した「キャンパスの中のキリスト教シンボル」ですが、シンボルを、通常の認識方法では把握できない事物のリアリティを「既知の事物と結合させることによって感知し、表示し、伝達する」(今橋朗)ものと理解するならば、キャンパスに設置されたステンドグラスもこれに含まれることが出来るでしょう。

ステンドグラスとは、着色



されたガラスの組み合わせによって造られ、主としてガラスに当たる光を想定して建築物の窓に設置されるもので、

その目的は装飾や物語表現にあると考えられています。とりわけ一二世紀末以降のヨーロッパにおいては大きな窓を設置するゴシック様式のキリスト教会の建築が進み、ステンドグラスはその「生動する色彩表現」(前田富士男)をもつて従来の壁画に代わり会堂を彩るようになっていきました。

関西学院大学に設置されるステンドグラスは複数ありますが、例えば上ヶ原の大学図書館に設置されるステンドグラス「光あれ」をご存知でしょうか(写真上)。この作家は本学に学んだステンドグラス作家、森場さとしさん(一九四八

年愛媛県生まれ、北海道池田町在住)によるもので、一九九七年の上ヶ原の大学図書館のグランドオープンに伴って設置されました。神による天地の創造を物語る、旧約聖書の創世記一章三節の言葉が重なります。「神は言われた。『光あれ。』」こうして光があつた。『光あれ。』」

葉を引用した美術史学者の前田先生は、一般と異なる教会堂のステンドグラスの機能は単なる採光や装飾に留まらず、会堂内の作品と設計に連動して典札や礼拝の意味を具体化する「プログラム性」を帯びると言います。キリスト教学校の建築物の、特に真理を通じた自由

を思わせる図書館の入り口部分に設置されるこの作品「光あれ」にも単なる採光や装飾を超えたプログラム性を覚えると言つて言い過ぎでしょうか(写真下、ステンドグラスの反対側の壁に刻まれる言葉)。

上ヶ原の図書館にお立ち寄りの際にはぜひ一度このステンドグラスを見上げてみてください。あの言葉「光あれ」の意味について、その光を通じた美しい表現から豊かに受取ることが出来るかもしれません。(参考文献・前田富士男「ステンド・グラス」、今橋朗「シンボル、象徴」『キリスト教礼拝・礼拝学事典』)

## 映画とキリスト教 (3)

『刑事ジョン・ブック 目撃者 Witness』

(製作：一九八五年 監督：ピーター・ウイアー)

RCC 主任研究員 大宮 有博

## ◆ストーリー

ペンシルバニア州の片田舎。そこには電気や電話、自動車といった現代文明を拒否して、石油ランプを灯し馬車に乗った一七世紀のままの生活を送るアーミッシュの人々の暮らす村があった。そんな村の少年がある日、殺人事件の現場を目撃してしまった。刑事ジョン(ハリソン・フォード)はこの少年サミュエル(ルーカス・ファース)とその母親レイチェル(ケリー・マクギリス)の護衛を担当するが、少年を襲おうとした一味に撃たれて負傷した。ジョンは傷が癒えるまでアーミッシュの村で暮らすことになる。映画にはこのジョンの目を通して、アーミッシュの暮らしが描かれている。そしてジョンの存在が伝統的なアーミッシュの村に小さな波紋を投げかけた。

## ◆解説

アーミッシュとは

アーミッシュは一六世紀のスイスでメノナイト派から分離して誕生した。聖書の教え

を忠実に守り、絶対平和主義を貫くところに彼らの特徴がある。彼らは政治と信仰の分離を徹底し、政治権力に強く反発したため、ヨーロッパ各地で迫害に直面した。そのため一八世紀になって宗教的に寛容なペンシルバニア州に移住した。クウエーカーによって建設されたペンシルバニア州は、アメリカ独立直前にスコットランド系長老派が議会でも多数派となるまで、宗教的にはとても寛容でカトリックやユダヤ人も含めて宗教多元な社会であった。

ヨーロッパからペンシルバニアに移住してきたアーミッシュは、現代文明や世俗を避け、自分達の共同体内で助け合い、農耕や牧畜による自給自足の生活を送るコミュニティを建設した。

アーミッシュは「あなたの敵を愛しなさい」という聖書の言葉に従って、自衛目的ですら武器を持たず、絶対平和主義の立場を取る。映画の中にもアーミッシュの青年が暴力をふるうことをぐつとこら

える場面がある。彼らはフレンチ・インディアン戦争や独立戦争の時に兵役の義務も拒否し、そのことで血の気の多いスコットランド系長老派と対立した。後に彼らが良心の兵役拒否の権利を得るまで、彼らの考えは誤解され、偏見の目で見られてきた。

また映画にも描かれているように、彼らは今でも「観光資源」とされ、周辺住民からは奇異の目で見られるのに耐えなければならぬ。

アーミッシュはオールド・オーダーとニュー・オーダーの二つに分かれる。この映画で描かれているのはオールドウヌングと呼ばれる戒律を厳格に守るオールド・オーダーの共同体である。オールド・オーダーの人々は、個人の住宅や納屋を集会所にして礼拝を守り、質素な生活を送る。映画にも出てくるが家を建てたり、収穫をしたりといった時には皆で助け合う。また服装も質素で特徴がある。

映画では少年の母親レイチェルがコップと呼ばれる白い帽子で豊かな髪を覆っている。これはアーミッシュの女性の服装の特徴である。コップをかぶるといことは、女性がイエス・キリストと男性に従うことの証であった。レイチェルがジョンとの仲で噂を

たてられた時、レイチェルは父親に抗弁する。それに対して父親は「悪いか悪くないかを決めるのはこのわしであり、長老であり、周りの人々だ」と諭す。アーミッシュのコミュニティでは、男性の長老と「周知」すなわち社会が決定権を持つ。オールドウヌングの定める秩序を乱したものはコミュニティから追放されることもある。このようにアーミッシュのコミュニティは一方では相互扶助の社会であったが、他方では家父長的な社会と言える。

## 『アーミッシュの救し』

さて、映画からは少し離れるが、アーミッシュがどれほど聖書の教えに忠実かを示すエピソードを紹介したい。二〇〇六年一月二日、ペンシルバニアにあるアーミッシュの学校に男が侵入し、六歳から一三歳までの五人の生徒を殺害し、五人の生徒に重傷を負わせた。一三歳の少女は、自分より年下の子どもに銃が向けられた時、「私を撃って」と言って犯人の前に出たと言う。犯人はその場で自分を撃つて亡くなった。アーミッシュ独特の服装をした家族の嘆く姿が、世界中に中継で配信された。

しかし世界に本当に衝撃を与えたのは、その事件の起き

た夜の出来事である。複数の被害にあったコミュニティの人々が加害者の家族のもとを訪れて、赦しを宣言し、慰めの言葉をおくったのだ。それからか世界から被害者と遺族のために寄せられた寄付金の一部を、加害者の家族にも分け与えた。このようにアーミッシュは「あなたの敵を愛しなさい」という聖書の教えを忠実に守り、聖書に出てくる赦しの教えを実践したのである。このエピソードは聖書の教えに本当に忠実であるとは、一体どういふことかを私たちに教えてくれる。

このことについて詳しく知りたい方は、ドナルド・クレイビル著、清水玲訳『アーミッシュの救し』(亜紀書房、二〇〇八年)を読んでいただきたい。

## 編集後記



今回は新たに就任したセンター長の挨拶、シンボルと映画論の連載に加え、進行するRCCの活動と研究プロジェクトを紹介しました。いかがだったでしょうか。次号では他大学の先生方による講演内容をご紹介できるかと思えます。楽しみにお待ちください。

(Y・H)